

短編小説

「みんなのお父さん？」

(改変最終版)

うときゅう いっき

by Khazu san

物書き

うときゅういっき



2023/12/7

「みんなのお父さん？」

(改変最終版)

第1節



話を聞いたからと言って、特に自分で料理を作ろうと思ったわけではないのですが、出てくるものが、どういう手を加えるとそのような姿になるのかに幾分興味があったのと、離婚を経験した五十代半ばの男が一人で来て、そうそう偶然に、見知らぬ人がいい話し相手になることもそんなにはないので、自然といつも目の前にいるお店の板前さんとお話をするようになりました。

手さばきから、若いのにかなり研究熱心なのがわかったのですが、かといってそうした職人さんに有り勝ちな気難しさやお堅いところもなく話し方にも誠意が感じられるし、人当たりもいい。

趣味はというとロック。しかもギターを自作したりもする。そのせいか女のお客さんにも人気のあるちょっと面白い人でした。

ある夏の夜、同じカウンターの並びの一番左奥に、自分と同じか、それより少し歳上と思しき小柄な女の人が座り、なにやらこちらをじろじろ見ていました。

その日初めて見る人でした。

話し方や振る舞いが少し他のお客さんとは違うような感じがしました。ちょっとずれている感じがして「幾分浮いているかも」と思いましたが、どうやら僕と同じで、その人もこの若い板前さんがお気に入りの様子。盛んに話しかけています。と、同時にやはり時々、こち

らをじろじろ。

ですが、その「関心」に反して、板前さんを頂点にした二等辺三角形の二辺は交信があったのですが、ぼくとその女の人を結ぶ底辺の交信はありませんでした。

その数日後、再び同じ配置になりました。

なにやら今度は、

「マイセンのカツサンドをたくさん買って来たからみんなで食べて、お客さんにも」

と板前さんに差出し、若い板前さんも

「毎回恐れ入ります」

と答えているので、幾分退屈をしていたこともあって、敢えて

「たいそうお金持ちですねえ」

と声をかけると、

「あなたもおひとついかがかしら？おいしいのよ、これ」

と言いながら

「そちらにいてもいいかしら？」

と僕の返事を待たずに、にこにこしながら隣の席に移ってきました。そうして、

「あなたこの前、お見かけしたときに、お隣の方に、たばこ吸いますが大丈夫でしょうかとお訊きになっていましたでしょうか？近頃珍しい御紳士な方でいらっしゃる事とと思って…」元々が、子供の頃から余り好き嫌いをせずに、誰とでも仲良くする質（たち）なので、程なく、それから何度か日時を決めて、お店で会うようになりました。

そのたび毎に、日本橋高島屋のどこそこの売り場のお土産だと言って、板前さんにそれを差出していましたが、よく見ると、受け取る時に、ほんの少しためらいのようなものがあるのが感じられました。

しかし、当のご本人は何も感じていないようでした。

とにかく日本橋高島屋が大好きなようで、日本橋の高島屋以外はデパートとして認めていないみたいでした。

訊くとその人は、高校までアメリカで暮らしていたそうです。そのせいかどうか分かりませんが、全く唐突に、かなり場違いなタイミングで英語が飛び出すのです。

ところが、時々使う、本人だけは「ここぞ」とばかりにねらったつもりの、その場違いなタイミングの英語の発音が何故かとてもへたくそなのです。

まず、長文は話しません。発音も巻き舌ではなくて、なんだか舌の中に直角三角形定規でも入っているような感じです。水を米語の発音では「ウァラー」というべきところ、なにやら「藁（わら）」に聞こえたり、気にしなくていいよ、の「ドンマイヌ（又は小文字）」が「吞舞（どんまい）」のように完全に漢字読み聞こえたりします。なんだかちょっと胡散臭い気もします。

確かにお金はありそうですが、何かちょっと変なのです。

甚だ傲慢かとは思いましたが、発音だけとれば、僕の方がまだましかもしれないと言う感想

を抱いたりもしました。それにしてもそのような感想を抱かせてしまうレベルとは？
相当の年月、彼の地で暮らしたはずなのに、ここまで発音が直角、カタカナ読みなのは向こうで何かそうなる事情があったのかもしれない。例えば、暮らしていたのは外国だけれども、居場所としては自分の部屋ばかりだったとか…引きこもっていたとか。今見ると華やかに見えるけれど、ひとはわからないものだし。

第2節



そのうちその人は、初めはとても淑女然としていたのですが、暫くすると横にぴったり張り付いて、間においてあるお皿に乗った煮魚の身を箸でぐちゃぐちゃになるまでほぐしてから

「はい、お口、あーんして、たべさせてあげるからね」と言った後、

「おいちい？」

とまるで二十代の「彼女」のようになり、次は

「ホールの子、あなたを狙っているわよ。そんなこと、させないから。来たら嘔みついてやる！」と夜叉にもなり、最後は淑女の「し」の字も、跡かたなく消え失せ、それがその人一流の親しみの表現なのか、それとも本気でそう言っているのか、わからないのですが

「おだまり！シャラップ！頭（ず）が高い、静かにおし！」

とまで言うようになりました。

食べ方もあまりキレイではないし、こうまで乱暴な口の利かされ方をされると

「本当に言う通りの素性なの？」

と疑いの気持ちが生まれてきました。

ところがあるときには、そうした「猫っかぶりの淑女」が口にするとはいえないほど、殊勝

な態度で、しかも全く前後の話とは脈絡なく唐突に

「わたし男の人とああなるの、キライなの。ああいうふしだらなの、イヤなの！分かる？ユーノウ？」

と酒の席ではあったにせよ、返答に困るような内容の質問を仕掛けてきたりもしました。そうしてその後「うにゃむにゃ」いいながらカウンターに突っ伏してしまうのです。

と、思いきや、またぞろそこから、やおら頭（こうべ）をもたげて、

「わたし、頭のいい人好き。それに、どこに住んでいるかなんて訊かないところも」

といいつつ、こちらから質問したわけでもないのに、自分は実業家の一人娘で、家にはお手伝いさんが居たこと。

家族と帰朝後、ミッション系女子大に進んだが、卒業後働いたことはないこと。

父親が「ゆりっぺ、ゆりっぺ」と猫かわいがりしてなかなか手放してくれなかったので、結婚は37歳までしなかったこと。

結婚した相手は鉄道技師で、週に何回かは泊まりで帰って来ないこと。

料理はしないで、ほとんど出来上がったものをお取り寄せするのだが、主人は文句を言わない。そういう約束で結婚したのだから、ということ。

お子さんは、自分みたいなのがもう一人居ては相手をするのにこまるので、作らなかったこと。

父上は既に他界していて、莫大な遺産を、そんなにあっても仕方ないけど、相続だけはしたこと。

ここで飲んだ後は、いつも六本木のバーに行って、みんなにドンペリをおごっていることなどを酔った口から、きいている方もいささかうんざりするでしょうが、こちらも、ここにかいたのですら要約済みの抜粋版でしかないほど、このことに関しては細大漏らすまいとでもしているかのように、そのひとは、ひとりでどンドン喋ってきました。

そんな話を聞いていてふと思ったのですが、この人は、かなり幼い時から、母親がいなかったんだろうなと思いました。

滞米時の暮らし向きは知るよしもありませんが、本邦においては、長いこと父一人、娘一人。いつもお取り寄せかお手伝いさんの料理ばかり。料理を作ったこともなければ、作ろうと思ったこともない。作ってくれともいわれなかったから。でも父娘、仲良く暮らしていた。それともう一つは、なんだかとっても焼きもちやきで、こころの振幅もかなりあるひとだなとも思いました。焼きもちについていえば、「嫉妬」や「ジェラシー」ではなくて、「焼きもち」。お目めメラメラではなくて、ほっぺを「ぶーっ」と膨らますような。

例えば、その人がいないときに、僕一人で行って、ほかの女のお客さん、それはもう80歳のおばあさんを囲んでの二、三人の女性だったのですが、僕がそのグループと仲良く話しているのを入りしなに目にして、僕と目が合った途端、「ぶい」とへそを曲げて、お店から出て行ったりもしました。

お店の子に嘔みついてやると言ったことや、ぶいと出て行ってしまったことを思い合わせ

ると、この子、といっちは失礼なのですが、なんとなくやはりこの子としか言いようがありませんので、この子は、まるで大好きな親戚のお兄ちゃんを盗られまいとする、兄妹の居ない女の子が「くるな！ここからあたしの陣地。私のお兄ちゃんよ。家来は私だけなの。わかった？さわらないで！あっち行け！」みたいな感じがしたのです。

他の人には女王様然と振る舞うのですが、何故か僕に対しては、まるで小四の女の子みたいに振る舞っていました。

しかも、勘が強くて、焼きもちやきの子なので、確かにいると問題は起こすし、そのくせまわりついて、いささかうるさく思うこともなくはないのですが、居ないとなんとなく物足りなくもあり、妙な心境というか、気分でした。

第3節



そんなある秋の夜、かなりのレベルで酔っているのに、六本木のバーに行こうとするので、心配になって

「ゆりっぺ、もう帰った方がいいんじゃないかな」というと

「おだまりっ！誰に向かって口をきいているの？私に指図しないで！」と吠えた後

「ご主人様じゃないんだから、ゆりっぺ、なんてなれなれしく呼ばないで！「百合子様」と、お呼びっ！」

と更にご機嫌斜めになり、それでもよたよたしながら行こうとするので、やむなく電車で一緒について行きました。

「わたしのこと心配？そう？だったら、嬉しいわ。許してあげる。かわいいっ！」と、今度は甘えん坊さんの態度です。

ところが、お店に入る直前になって

「子供じゃないんだから、平気よ、早く帰ってよ。あたし、みんなに優しい人なんて大っ嫌い！」

と、僕の何がご機嫌を損じたのか分からないまま追い返されてしまいました。

しかし、それでもやはり心配だったので、バーのあるビルの外に出て待っていました。

もう午前1時を回っています。

小一時間ほど待ちましたが、お店から出てくる様子がないので、ビルの階段を上がってお店の前まで行くと、その子が重そうなドアの前の床に突っ伏して眠っていました。

しかもお漏らしをして、その水たまりの中に

驚いたことに、大きい方も、一本ごろりとおわしまして。

おそらくスラックスパンツを脱いでいたのかも。

ちょっと困りました。

いや、かなり困りました。

いやいや、おおいに困りました。

見て見ぬふりをしようと思いました。

ひょっとして、本当は眠ってはいないで、薄目を開けているのだとしたらと思うと、出来るだけ静かに、気づかれないように後ずさりをして階段を忍び足で降りました。

ドンペリを毎回頼む上客に、お店はこんな扱いをするだろうか？ということをおい合わせると、何か見てはいけないものを見てしまった、恐怖とも罪悪感ともつかない気持ちに襲われました。

しかし、放っておく訳にもいきません。

仕方がないので、タクシーを呼んで、無理矢理抱え上げて、くずおれるように二人でバックシートに転がり込みました。

タクシーの後部座席で、その子は本当に眠っているのか？本当は起きているのか？よく分かりませんでした。

とにかく何も気づかなかった、見なかったことを印象づけないと、と思い、なにやら独り言のように、いろいろおとぼけの絵空事を言ったのですが、それが役に立ったのか立たなかったのか分からないまま、2万円を払ってタクシーから降り、運転手さんにお客さんを起こしてから、言うところまで届けてあげてくださいと頼んで、地元の駅のタクシー乗り場から小一時間かけて歩いて自宅に戻りました。

多分もう、連絡してこないだろうなと思いました。

第4節



ところが初冬のある夜、また、その子はお店にやってきました。そうして、ここは飽きたからほかのお店に行こうといいだし、別のお店に移りました。

そこは居酒屋さんなのですが、半個室のボックス席になっていて、席に着くなり

「わたし、ここのオーナー社長と懇意にしているの。ちゃんとサービスするのよ！」

とお店の人を一喝。あまりの唐突さと、場違いな権威の発揚を、こりゃちょっとまずいと思った僕は

「自分がもしそんなこと言われたら、どんな気持ちになる？却って逆効果じゃない？やめた方がいいと思うよ」と言うと、

「それもそうよねえ。アツタマいい！好きよ」

と言って、唇を押しつけてきました。

ぼくはお店の人が見ているからと、遠慮をしたのですが、その子はなかなか離れてくれませんでした。

ふと見ると、靴を脱いで上がった板張りのボックス、そのテーブル下のやや厚手のウール地の靴下に穴がいているのが目に入りました。

お金持ちの奥様の靴下に穴ポコ？

そういえば、お金持ちの奥様の割には、スカートをはいている姿も、和服の姿も見たことがないなと思いました。いつもスラックスかジーンズです。

その後、暫く飲んでから、僕らは外に出て、少しふらつく身体を支えてあげながら、駅まで連れだって歩いて行きました。

そうして別れ際、拒むように遠慮したり、靴下の穴ポコに気づいちゃったりして、ちょっと可哀想だったかなと思い、酔っていたせいもあって、僕は駅、改札前の人通りの多い中で、殆ど鯖折りをするみたいに、その子を、ぎゅっと抱きしめました。

その子の身体が後ろに、ぐっとのけぞりました。ぼくは力任せに鯖折りを続けながら「まいったか？まいったか？」

と、「何がまいったか？」なのか自分でもよくわからないままところの中でつぶやき、自分

でもわからないそれが、逆にその子にはわかったのか？その子は、今までになく腕の中で、消え入るくらい静かにしゅん、となってしまうました。

第5節



その後、その子と暫く会うことはありませんでした。夏に知り合い、秋を深めて、大晦日が過ぎ、年明け暫くして、聞いていた携帯の電話番号に電話を入れました。

以前もお誘いの電話をしても出ないことが何回かあったので

「これじゃあ、電話番号を教えて貰った意味がないと思うけど」と言うと

「ご主人様がいるんだから、そのくらい分かるでしょ？」

と言われたことがありました。

それで、以降、電話は控えていたのですが、なんかやたらに恋しくなって、「禁を破って」電話をしてしまいました。

「今日くらいは、ちゃんと出てくれよな」と思ってかけたところ、数回のコール音の後、誰かが電話に出ました。

「はい、百合子の夫ですが」

慌てました。

ご主人が、その子の電話を取り上げてしまった？見つかったの？

僕は当時、離別した後のひとりもので、問題はなかったのですが、相手にとっては「不倫」と言われても仕方がない状況です。まずい！

そうとっさに思って「ちょっとした知り合いで、たいした用事ではないんです。はい！」と言おうとしたとき、

「生前百合子がお世話になられた方ですか？ありがとうございます。百合子は今年のクリスマスイブの前日、23日の深夜に亡くなりました。お風呂の浴槽で溺れ死んだんです。さみしかったんだと思います。本当に可哀想なことをしました。私も留守がちで。それで毎

晩飲み歩いて、とうとうその日も、泥酔して帰ってきた後、お風呂に入って、蛇口を開きっぱなしにして眠り込んで溺れてしまったようです。朝仕事から帰ってきて、返事がないので、家中あちこち探し回って、お風呂場で見つけました。何が起きたのか分かりませんでした。茫然自失でした。

警察が不審死として、調べにも来ました。慌ただしい年の瀬とお正月でしたが、やっと少し落ち着きました。どちら様か存じませんが、出来れば百合子の冥福をいのってやってくださいまし」

いつの間にか電話は切れていました。

おそらく長い事、自分が無言のままにいたからかもしれません。

家族の中の誰かが死んだような気分でした。

第6節



一体あれはなんだったのか？おつきあいをしたのか？不倫をしたのか？それとも親戚の中三のお兄ちゃんが、一人っ子で兄妹の居ない小四の女の子の遊び相手になってあげただけだったのか？

そういえば、お兄ちゃんという言葉で、ふと思い出しましたが、一度だけ僕が声を荒げたことがありました。この親戚の小四みみたいな女の子のあまりのわがまま、ご無体を年上の男子としてさすがにこらえきれなくなり

「僕はキミの家来ではないっ！」

と乱暴に立ち上がり、その子を置き去りにして、お店から出て行ってしまったのです。

その後、その時のことを話す機会があって、この子が言ったのには

「あの後、わたし、追っかけたのよ。探し回ったの。駅までも。駅の反対の改札までも。追いかけたなんてはじめて。今まで誰からも怒られたことなかったから」

とっていました。

処がその後一転、これまた唐突な話の展開にしか思えない切り出し方で

「街頭の「あしなが募金」に一度に3万円を寄付したら、周りから変な目で見られた、大きなお世話よ！可哀想な子たちにはお金がいるのよ！」

と言ってもいましたっけ。

今思うと、なんとも気まぐれでとらえどころのない子でした。本人は別に人を煙に巻くつもりも、煙に巻いてそれを楽しんだりするつもりもさらさらなくて、ただただ自分に正直にしているつもりらしいんですが、ぼくや僕を含めた周りからすると、言っていることや遣っている事が、何故そう言い出すのか？何故そんな事をするのか？その答えを見つけるのがそう容易くなくて、「よく分からない」事だらけになったりもしていました。

しかし今思い当たったんですが、本当を言うと、見ていられなかったのだと思います。危なっかしくて。この子、この先どうなっちゃうんだらうって。通り過ぎようとして、通り過ぎられなくなっちゃったんだと思います。放って置けなくなってしまうていたのかな、と思います。

最終節



それから数年が経ちました。

その間に僕は他の人とお付き合いをし、程なくお別れしました。その別れ際に、お付き合いをしたひとが

「みんなのお父さんになりたいだけなのね」

と言い残して去りました。

「みんなのお父さん？」

路傍の石を？みんなのお父さんが？拾ってあげた？助けようとした？天にまします我らの父として？お兄ちゃんではなくてお父さんとして？

そういえば、今思い返してみるとぼくは、ゆりっぺの後にお付き合いをした人も含めてお父さんの居ない子や、おとうさんの影響が強すぎるための問題を抱える子によく好かれていたことに思い当たりました。

初めての恋人もそうでした。その子は父親の代役として僕のことを好きになったのです。そうして、そのことに気づいて去って行っていった…

もしかして、僕は、問題を抱えている子を敢えて選んできた？何故？糧にしようとしていた？何の糧に？

対等ではない。庇護する立場。遠目に見る立場。救う人間。手を差し伸べる人間。多分上から。余裕を持って。余裕綽々で。手のひらの上で。遊んでいいよって。天にまします我らの父。僕だけが知っている貴女の本当の顔。僕だけが知っている仮面を脱いだその素顔と仮面をかぶらずに済む方法。仮面をかぶらずに済むのは此の私の前でだけ。選ばれし救い主のいい気分。情け深き父。博愛の極み。

何の糧に？みんなのお父さんになるために？つまり、天にまします我らが神さまになるために？

「これって宗教じゃないか？」

だからある距離以上には入ってこない。あるいは、入ってこられない。こちらも出て行かない。出て行かないと言うより「下に」降りない。

それじゃあ男と女になりきれない。いや、なるわけがない。恋愛ではなくて親子か師弟。それで去られる。いや、それじゃあ逃げる。

恋人になろうとしていなかった。夫婦になろうともしていなかった。だのに恋人になり、夫婦にもなってしまった。父が娘を家畜かペットにするみたいな妙なもの。そうして自分のことは棚に上げての、非常に巧妙且つ迂遠で遠回しな、モラル強化に見せかけた、その実、実態はモラル・ハラスメント？いや、巧妙且つ迂遠という顕在意識レベルでのそれより更に悪い、潜在意識レベルでの「意識操作」？いや、いや「無」意識操作？これは余りにも…

天にまします我らの父は当然女の人とはお付き合いもしませんし、結婚もしません。いつも独りです。それは神さまの絶対条件みたいなものなのかもしれません。

その絶対条件を守るために、天にまします我らの父でいるために、殆ど無意識レベルでの、実に巧妙にカムフラージュされた手口を使って、常に独りでいるために、その孤影、いや、弧を描いて、その内側に人を入れず、自分もまたその弧の外に出て行かない、弧の中に独りの「孤独」を守るために、僕はこころ密かに相手の方から去るように仕向けていたのではないか？

にわかにならなくなったその疑問を前に、僕は酷くたじろぎました。そしてそれはやがて、確信に変わりました。自分は、みんなのお父さんどころか、何か見るのもおぞましいもの。伶俐な月明かりの下で、隠された本性を浮かび上がらせる冷たくひえ切った「蠟性(ろうせい)の魔物」のような気がして、自分自身に青ざめていくのを感じるのです。

「あなたの頭の中は、何か他のことでいっぱいなのよ。他の女(ひと)じゃなくて、ほかの何か。あなたは、ほかの何かをいつも見ている、ここにいるけど、ここにはいない。同じものを見ている、全く違ったものが目に映っている。私はいつも一人のような気がする。この先、ずっとどこまで行っても、あなたの中に、私が入る余地はないような気がする…いつも

わたしは、置いてきぼり」

長年忘れていたその言葉を思い出した瞬間

「あたしだけ見ていてほしいのに。猫っ可愛がりしてほしかったのに。主人もあなたも、私は二の次の置いてきぼり。お父さんみたいにしてはくれなかった。なんで、お父さん、死んじゃったの？私一人をおいて。もう、いやっ！わたし、これからお父さんのところへ行く！」

「ひょっとして…ゆりっぺは…」

(おしまい)